

「家がいいね」 第48号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2008. 5. 13



開院して6年が経ちました。今まで、このロゴマークについてはあえて説明して来ませんでした。皆さんの目にどのように留まるか楽しみでもあったからです。私もイメージが膨らむ時間が欲しかったのです。「ハートがハトになる」と解いた人もいました。では、今思うところを。いのちは沢山の形がある。あるいは形に囚われない。いのちは誰かの所有ではない。自分の物でもない。どうでしょう。あなたはどう思われますか？

映画ってイイですね

世界一周か、お遍路をする時間が欲しいと思っただけかもしれませんが、それに近い濃縮した時間が、講演や映画の中に詰まっていることがあります。

「潜水服は蝶の夢を見る」進富座 15日まで

43歳で突然に脳梗塞に倒れた体験が画面に出ています。意識は正常ながら、左目と瞼の動きだけしか動かせない「閉じ込め症候群」。絶望的な状態から彼は、療法士の助けを得て、一文字一文字を瞼の動きでつむぎ始め、コミュニケーションを回復し、自伝を世に送り、去ってゆきます。初め氷山が海に崩落するシーンが挟み込まれますが、エンドロールは同じ画面をゆっくり逆回しします。彼の努力は時間の遡りにも匹敵するのでしょうか。

「最高の人生の見つけ方」ロードショー館

原題は「棺おけに入る前のやりたいことリスト」。二人の名男優に、黒澤明監督の映画「生きる」のアメリカ版をさせたようなものです。残りの時間を限られた時から、治療だけに生きるのではなく、人生の課題に直に向かい合うこの現代版、口数も金回りもけっこう贅沢なものだと感じました。

富豪でなくても、保険金を前払いしてもらえば日本でも同じ事は出来そうです。実はこの手順をなぜか保険会社は教えたがりません。詳しい資料はクリニックにありますので、「相談もどうぞ」

学習会「悲嘆のケア」を聴いて

4月27日に衣斐弘行さんの「生死のはざまへ悲嘆のケア」を聴きました。豊富に文学や仏教の逸話をお聞きして、「生きる覚悟」が今ほど弱い時代はないように思います。

その中で、ブッダは自然死だったと改めて考えさせられました。実母の死と引き換えに誕生した彼は、深いウツに沈む子供でした。成人して王子の座を捨て、壮年で悟りを開きましたが、悟りを他人に伝え80歳で亡くなる後半が困難で長い道のりでした。老いと病いを自らの身体に感じつつ、供養の食事を身に引き受けて、下痢を悪化させながら、涅槃の地に向かったと聞きます。この世は苦と執着であり解脱をすめられましたが、「この世は美しい。人の命は甘美なものだ」(瀬戸内寂聴「釈迦」より)との最期の言葉は、老病別離を通り抜けてこそその人間礼賛に聞こえます。

緩和ケア講演会

みえ生と死を考える市民の会の講演会です。

講師 大下大圓(だいえん)さん

(飛騨千光寺・住職)

スピリチュアルケアワーカー)

「生きる意味とこころのケア」

日時 6月1日(日) 13時半～16時

場所 三重県総合文化センター・小ホール

一般800円 (前売りチケット販売中)



「終わりよければ」いせの会

毎月第3木曜に、いせTピア学習室2 無料

5月15日 定例懇談会 19時から

6月19日 講演会 19時～20時半

講師 吉田利康さん (尼崎市 市民)

「妻を自宅で看取って思うこと

つらかったけど良かった 三つの告知」

